

# 二、日常生活

## 食生活

### 主食

主食は、米・麦・粟でした。水田が湿田（ぬかり田）ばかりで面積も少く、生産量も少く、それに年貢米を納めると残りはごく少いことで貴重なものでしたので大半の家では麦や粟に米を交せて炊き上げて食用にして居った様です。其の後文久年間に用水が出来畑地が水田に変わり米の生産量も増えて来ました。副食としてさつまいも・里芋・野菜等でした。又山野に自生する蕨や蕨を乾燥させて保存し食用にした。今だにして居る家もある。調味としてみそ・しょうゆ等は皆自家製でした。昭和に入りしゅうゆは商店より購入し、みそは冬に自家製造している家もある。お茶にしては五月初めにつみ取り、せいろでむし、ほいろの中に炭火を起し其の上で乾燥させ一年間飲

用する分を作りました。どぶろく等自家用として酒税を納めて作った家もある様です。明治十九年頃でした。お膳などはほとんどの家が一人づつで、昭和に入り食卓等を建具屋さんに作ってもらい使用した様です。釜や鍋は最初は土焼のもので其の後鉄製になり、戦後になりアルミ製品が出廻り初めました。燃料の変化とともにガス釜や電気釜等が出廻り、現在はほとんどの家がガス製品や電気製品になりました。

### 野菜

昔は、現金収入がないためにわずかな畑地を利用して、あらゆる作物を栽培をしていた。当時は、いろいろな参考書、指導機関もなく栽培に関する知識も貧しかった。そのために年寄りの経験を聞いたり、井戸ばた会議、共同作業、その他いろいろな集り等の中から芋んだり、話し合いをし、お互に体験談をしながら栽培技術を覚え自家野菜の確保に努めた。例えば、種・苗等についてはお互にゆずり合いをし、もともとめていた。又肥料についても、

マーヤゲ、下肥程度であったのでほんとに体験をして身につけたのである。

主な栽培品目はナス・キュウリ・白菜・キャベツ・ホウレン草・ねぎ・インゲン・タマネギ・大根・ゴボウ・ニンジン・落花生・大豆・小豆・ソラマメ・サトイモ・ジャガイモ・トマト等であった。

この様に以前は、皆自分達で丹精し、努力して来たが、最近の状況を見ると、文化生活となり現金支出も多くなつた関係もあると思うが（出稼ぎが多くなり現金収入も多くなつた）大部分の家庭で、野菜を買っている状態である。したがって耕地が遊んでいるので先輩のことばを借りれば「もっと、もっと努力すればよい」と言われる。今日この頃である。

### 物を売りに来る人

さかな屋 月に三、三回  
 種物屋 春、秋  
 髪油売り 年に一度  
 小間物屋 “ ”  
 呉服屋 三年に一度  
 バリカン屋 “ ”

△昭和九年 瀬川メモ▽

### 物の値段

手もとの資料不足のため、系統的にうつり変わりをたどれないのが残念であるが、むかしの値段といまの値段を比較することによって、むかしの生活の一端を知ることとも興味深いと思われる。

- 正徳四年（二三七年前） 田四畝一〇歩 二匁三分
- 寛政二年（一九一年前） 中畑四畝一六歩、二五歩、三畝二二歩、三畝、中山一反二七歩 以上五筆 代金六匁
- 明和四年（二二四年前） 下田八畝二〇歩 八匁二分
- 萬延元年（二二一年前） 下田一畝 二匁
- 明治二年（二二二年前） 畑三畝一六歩 一〇匁一分
- 明治一三年 田四畝一五歩 四二匁
- 明治二五年 酒半樽（二斗）二匁五〇匁（一升一 二匁五厘）
- 明治二八年 読売新聞代 一か月五〇匁
- 明治四一年 朝報社（朝日？） 一か月一匁
- 大正二年 朝日新聞 一か月一匁
- 昭和五年 朝日新聞 一か月一匁
- 明治二九年 中食一人分五匁、酒一升二〇匁、醤油

一升一三匁、鉛筆一本一匁二厘、白米一升一一匁五厘、  
卵三つ四匁

○ 大正一四年 電灯料一〇燭光一か月九〇匁

○ 大正一五年 馬一頭一六〇円

○ 昭和二年 酒一升一円一五匁、醤油一升四五匁

○ 昭和五年 学校用新モスハチマキの切れ一本分

五匁、車麩(大)一本八匁、改良電球一こ三〇匁

○ 昭和八年 カモヤ地一反七五匁、新モス(二丈二

尺)六六匁

○ 昭和一〇年 ビール六本一円九〇匁、急須二〇匁、

さらし五二匁

### そばと米の値段の変遷

年代 年代 もり・か 米一升 世 相

明治維新 二四文 二〇〇文 文明開花の頃

明治 四 五厘 五匁五厘 お金の単位が両が円

になる

一〇 八厘 五匁四厘 西南戦争起る

二〇 一匁 五匁 中央銀行設立

三一 一匁五厘 一四匁八厘 日本鉄道株式会社設

立

三七 二匁 一三匁三厘 日露戦争

四〇 三匁 一六匁四厘 日露戦争による好景

気

大正 五 四匁 一三匁八厘 一次世界大戦

七 五匁 三三匁七厘 ベルサイユ講話

八 七匁 五五匁 米騒動

一二 九匁 五〇匁 関東大震災

昭和 五 一〇匁 三二匁 満州事変

一〇 一三匁 三五匁 不況時代

一六 一六匁 四七匁 二次世界大戦

二五 一五匁 八四円 朝鮮動乱

二八 二〇円 九五円 デフレ時代

三五 三五円 一二二円 安保騒動

三九 五〇円 一三七円 経済不況

四五 一二〇円 一二二円 高度成長

四九 一八〇円 三二五円 石油ショック

五〇 二〇〇円 三六五円 消費不況時代

### 笹住民のくらし

明治十〜二十年頃が暮しがよかった。  
農民の租税が役場に配当になるので村民の負担  
が少ない。教育費が少ないので村がらくである。

△昭和九年 瀬川メモ▽



## 柿

笹には、古くから柿の木が庭先や土手に沢山植えられ、古木として残っているが、これは、特に栽培されていたわけではなく、柿がこの地方の気候風土に適していたことと、果物として皆様に愛好されていたため、普及した物と思われる。

例えば、子供達が学校の帰りなどに、道端に赤くなつた柿を取って食べたこと、秋の取り入れどきに田んぼで食べた味は、又格別であったこと。干柿（つるし柿）は、お正月の食物として最高の品物であったこと、などである。この様なことから、販売については、干柿とエモン柿（樽ぬき用として）が少々あつた程度である。

いままで植栽された品種は、甘柿としては、「富有・エイトン・次郎・百目」、干柿としては、「ヨーラク・アオバッチャ」、樽ぬき用として「エモン」、熟して食べたものとしては「アカバッチャ」であつた。

尚、最近、一部の農家で富有柿（松本早生富有）が植栽されているが、少面積のために、家計を助けるという事にはならない様である。

## あかり

### あかり（灯火）の変遷

大正十二年亀山電気株式会社設立され全家庭ではないが、笹にはじめて電灯が点灯された。それも一軒の家に一〇燭光が一灯くらいで、長いコードがついていて食事の時には勝手へ、食事が済むと座敷の方へ移動した。したがって、行灯（あんどん）や石油ランプも長いこと併用された。石油ランプの使用も明治の終り頃からだつたらしい。昭和のはじめ頃ランプは盛んに使われホヤ掃除は子どもの仕事でもあつた。子どもの手がちようどランプのホヤにはいるからだつた。学校から帰ると新聞紙をまるめてホヤに入れ手を黒くして掃除をしたものだ。亀山の電気会社も東京電力に吸収され電力事情もよくなつたが、五番組・片倉方面は無電灯の時代が続いた。

終戦後の昭和二十二年東京の中井朝和氏が電線会社の知人から五ミリの電線を譲り受けてくれたので、五番組・片倉方面に電灯が点灯するようになった。

大正十四年の電灯料は一〇燭光で一か月一円六〇銭で、ほかの物価から比較するとたいへん高価であつた。（同

じ頃鴨川方面の電灯料は一〇燭光一か月九〇匁であった)  
なお、参考のために日本の灯火の変遷についてのべて  
みたい。

### 炉の火(いろりの火)

- 。 炉の火は屋内の唯一の灯火であった。
- この地方でも、昭和のはじめ頃は、いろりの火をかこんでなわなひなどをした。

### とうだい 灯台

- 。 鉄や石でかんたんにつくった台で、マツのヒデなどをこまかく割って燃やした。この灯台をヒデ鉢ともいった。
- 。 植物の実(ゴマ・ツバキ・カヤ・ヒョウビなど)からとった油が使われた。
- 。 菜種油が使われるようになったのは、江戸中期。灯台も工夫され、いろいろな形のものできた。

### あんどん 行灯・堤灯

- 。 植物の実からとった油を燃料とした行灯も、ながい期間使われた。
- 。 ローソクは奈良時代から知られていたが、高価な輸入品であった。

- 。 ローソクが日常に使用されはじめたのは江戸の中頃からである。

### ランプ

- 。 明治に入りランプの輸入とともに灯火も一変した。輸入品は高価であった。
- 米一升八匁のとき、三分芯吊りランプが一円二十三匁、五分芯は二円三十匁
- 。 明治五年皇居でランプが使われた。
- 。 一般の家庭でランプが使われはじめたのは、国産ランプのできた明治二十年頃からである。
- しかし、一般には石油消費量の少ない、カンテラが使われた。
- 。 豆ランプは、日本人が発明したとか。
- 。 年々増加する石油輸入高を心配して「石油亡国論」がでたり、ランプの取扱い不注意による火災多発も問題にされた。
- 。 この地方では、昭和になってもランプは貴重なものであった。

### 電灯

- 。 電灯がようやく家庭にはいり、ランプと併用で使われるようになったのは明治三十年代である。

- 初めの頃は、サラリーマンの月給が七・八円であったとき十六燭光（二十ワット）一灯が月一円三十匁とたいそう高価であった。
- 電灯会社でできたのは、明治十六年に東京、二十一年に神戸、二十二年大阪・京都、大正二年久留里、十一年松丘、十三年龜山である。

### 電球あれこれ

- 明治三十二年に国産電球の値段は一円二・三十匁、輸入電球は三十五匁から五十匁とたいへん安かった。
- 電球のフィラメントに日本は綿糸を炭化させたものを使っていたため、性能も劣っていて切れやすかった。ところが、アメリカのエジソンは、日本の京都の竹を炭化して使っていた。
- 性能は日本製よりはるかに優れていた。
- はじめは真空電球であった。しかも手吹きのため、ガラス球から空気をぬいたあとがとんがりとなって残っていた。へそのある電球はなつかしい。
- 後にフィラメントのタングステンの蒸発を防ぎ電球をながもちさせるために、アルゴンガスやチッソガスをつめるようになった。
- 寿命：はじめは二時間ぐらいであったが、大正三三ごろには一千時間にまでのびた。

はじめて電灯がともった夜

○ おばあさんがあたりを見まわして、突然大きな声を出した。

「あしたみんなして家の中の掃除をしなけりゃー」 目をそばめる明るさで汚れが目立ったのである。

○ 父親が怒鳴っていた。

「その障子はやくしめんか、電気の火が消えるぞ」大まじめであった。

○ 多くの人がつぶやいた。

「電気は はやいもんだなあ となりの家がついたと思ったら もううちのがついた」

### 亀山電気株式会社

大正十二年七月水利使用許可、同年八月株主募集、十三年六月工事実施の認可を得て小櫃川上流蔵玉字仲ノ台に水力発電所が設けられた。有効落差九・五米、二十四馬力、発電力十三キロワットの小規模ながらほとんど亀



山全域に点灯した。社長は蔵玉の鈴木理平、文化の遅れた亀山では画期的な仕事であり、生まれてはじめて電灯を見たという老人も多かった。

昭和十三年十月、経営の一切を東京電力株式会社へ二万六千円で譲渡し会社は解散した。

亀山電気株式会社創立趣意書

時代ノ文化的發展ハ日ニ月ニ進ミ殆ソド停止スル  
 処アラズ本村素僻陋ノ地ナリト雖世運ニ順応シ産業  
 ニ經濟ニ其振興ヲ謀ル真トニ刻トノ急務ナリト信ズ  
 茲ニ本村適切事業ノ一トシテ数ヘラレタル即チ小櫃  
 川本流ノ水力ヲ（於亀山村蔵玉字仲ノ代地先）利用  
 シ電気事業經營夜間ハ一般灯火用ト為シ昼間ハ其動  
 力ヲ以テ精米ニ製材ニ其他殖産興業上有益ニ利用シ  
 且ツハ家庭ニ於テハ夜業奨励ノ美風ヲ為シ一家団聚  
 トシテ勉学ニ課業ニ快感ヲ得ルガ如キ有形無形ノ効  
 果ハ挙げテ数フ可ラズ故ニ之レガ投資者ハ最モ堅実  
 ニシテ資金ニ対スル利殖ノ一ニセントスルニアリ希  
 クハ奮テ御賛成御申込アラムコトヲ

発 起 人

起業予算目論見書

亀山電気株式会社

一金五万円也  
 内金壹万五千元也  
 総 資 本 額  
 拂 込 金

内 訳

一金五百円  
 創 立 費  
 一金八百拾拾円  
 水力工事費（既設水  
 路利用）  
 一金四千九百六拾円  
 発 電 所 費  
 一金四千九百五円  
 配 電 線 路 費  
 一金參千百五拾円  
 需要者屋内工事費  
 一金六百六拾五円  
 工事設計監督予備費  
 計金壹万五千元也

中 略

右ノ通りニ候也

大正十二年八月 発 起 人

## すまい

### 住家

昭和二〇年を境として一般家庭の建造物は一〇〇年から一五〇年ぐらいのものが多く、ちょうど改造・新築の時期ではなかったかと推察する。一般家庭においては俗に三・六間口六間、奥行三間十八坪、もしくは四六といつて間口、六間、奥行四間で二十四坪。特別上流家庭では最高五・九、間口九間、奥行五間であり、各地区にも数える程しかなかったようである。

特に台所（土間）を広く間取り、雨降りどきの農作業もみすり、むしろ織り、縄ない、ぞうりづくり等に使用できるようにしていた。また、かまどは大小二個立てに土間の勝手に近いところに設置しており、大かまどはお正月の餅つきや味噌等の煮炊きに使用した。小がまご飯炊きに用いた。

屋根がかやぶきのため火災予防上、天井はほとんど女竹を用いて藤づるもしくは、とうづるにて縦横に編みあげ仕上げるのである。台所の突きあたりの裏場近くに炊事用流し台と水がめがある。主婦の調理場である。水が

めに水を汲むのは十〜十五才ぐらいまでの子どもの仕事で、雨の日などはつらく、今日では考えられない。

勝手はほとんど八畳間で中央に三尺角ぐらいの囲炉裏があり、主にお湯わかし、みそ汁づくり、寒い時や雨の日は、一家揃って囲炉裏をかこんで談笑したりする。また、炊き火の「おき」を集めて「五徳（ごとく）」の上で餅をのせて焼きながら食べる時もある。

風呂場の設置場所は、庭先もしくは裏場に母屋から離れたところにあり「火災予防上を考え」掘立小屋か野天風呂が主であった。貯水の設備がないため熱い時には、家族の者を選んで井戸から水を汲んできてもらう始末である。現在はタイル張りの浴室で冷水・温水が蛇口をひねると自由自在に使用でき、温泉郷と同じ設備とは、はなはだ対照的である。煙で涙が流れたことは、過去のことになりつつある。

農家にとって農耕に欠かすことができないのは牛馬である。必ず各戸に一頭はおり、畜舎は二〜三間、あるいは四間の建物であった。

便所は外便所といって九尺〜二間ぐらいの灰屋という建物があった。農業の肥料小屋であり、その一隅に大便所が置かれていた。電灯の設備はなく、夜の使用は大変で灯堤（ちょうちん）を使用し忘れて火災になった例もある。



母屋<sup>※1</sup>の妻廊下の突きあたり内に内便所があるのは上流家庭である。小便所は、玄関の台所の出口近くの壁ぎわに三尺×六尺ぐらいの簡単な囲いの中で使用していた。ネド（寝所）は三畳、大きな家では四・五畳の間。屋間でも暗い部屋で窓はなく、わずかに壁を塗った木舞の間を四角、丸型、三ヶ月型とそれぞれ塗り残して照明をとっていたようである。現在のようにガラスのない時代で、写真に残っていないのは残念である。

※1 妻廊下……母屋（おもや）の側面につけた廊下

※2 木舞（こまい）……むかしの壁はほとんど土壁であったため、下地に細い竹を縄で格子目に組んだ。それを木舞と言うが、その格子目を全部塗りつぶさないであかりとりの窓とした。

## 屋根葺替工事

部落五十三戸の共同作業にて萱刈り萱出しを行う。毎年当番者は二戸であった。葺替工事には共同責任はなかった。萱生地は奥笹一、〇六六番地七反五畝彦歩、長崎一、二八五番地一町三反三畝一八歩、椿通称岩野四反八畝一二歩内一部三ヶ所の原野を萱生地として維持管理を

する。

第一回の取番は明治二十五年拾貳月取番相川政吉氏相川丑松氏式名であった。区长世話人相川左代吉氏に依り支給する。二十五年以前にも萱葺屋根はあった事と思われるが、正規の記録に残っているのは之が最初である。

組合より当番者に対して助成をする。玄米式俵（共有田より小作料上り米に依る）年次により多少の相違はあった様である。藁縄二、六五〇尋（一尋は約五尺）每戸五〇尋二口抛出した。萱刈は毎年拾貳月拾日前後（当番者の都合に依り）と規定してある。当番者は当日現地に於て湯茶の接待をする。前日にたき木等亦入林の道路等を整備をする事になっていた。人夫は男成人とし事情己むを得ぬ家庭に於ては青年団に入団している十六才以上の男子は之を認める規定であった。後年女世帯にあっては女人夫も認める様になった。維持管理・火入れ等の人夫も之に準じた。萱出し人夫は当番者の日程に従い之を実行する。萱出し人夫は萱刈り人夫に準ずるも萱束十五束を背負える程度の体力者と成っている（萱束一束の目方約八〇〇匁）一日約二、五〇〇束×三、〇〇〇束を背負出す作業で大変きつい作業であった。急坂を一日五回×七回登りおりする。当番者の現地より遠い家では往復一里〜一里半もあった。萱束数は年次の出来、不出来で同様ではなかったが、支給束数の規定はなく萱生地の全





て、支給する金額は一月二十日現在の相場を以て支給する。第一回の受給者は宮野貞一氏相川勝之助氏二名である。

第一回支給金額はトタン百坪分六万七千二百円、大工職百人分六万五千円であった。この財源は共有林野より生ずる立木売上代金を以て充当する。主として薪炭材の売上げであった。然し所得倍増景気に依り電気・ガス等の著しい普及に依り木炭の需要急落に依り共有林野よりの売上金が徐々に少くなり、助成が困難と成り組合員の月掛金を持って支給を致した一時もあった。

土地ブームの時期到来と共に土地の売却に依り此の代金を以て助成を致し、拾数年に亘って苦難の道を歩んで来た屋根替工事も一段落を告げたのである。現在見渡す限り青屋根・赤屋根陽にさえて、都会を思わせる軒並である。

火災予防の点については自己出火でない限り、もらい火は八〇%以上安心出来ると確信出来得るものである。

## 改良かまど

昭和二十五年頃から生活改善と言う言葉が聞かれ、先づお勝手から改善が始まり従来のかまどでは煙が家中広

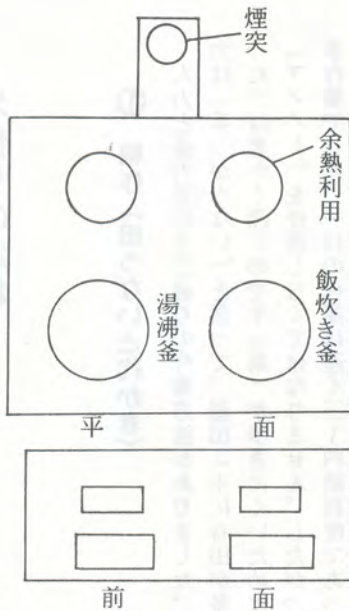
がり家財道具もすずげて黒くなり、たんすの中の衣類まで変色して仕舞う有様で、煙を外に出す様にしかるべく改良かまどなるものが出現したのである。

それはレンガ積で一米四方位の大きさ、若しくはもう少し大き目であったと思う。また高さが五十センチメートル位、レンガが約百五十本位で直接火の当る所は耐火レンガを用いて煙道を作り、壁をぬいて外に出し、煙突を取り付けて作ったものである。

工事は材料共七千円から八千円位で作る事ができ、当時職人一人当り四百円であった。茅葺屋根に煙突を出して得意としていた事は考えて見ても危険であり、また現在では許可になるはずはないと思う。

その後幾種類か簡単なかまども出来て格安なものも出廻り、移動式の既製品も出来て、ほとんどの農家では家中に煙を充満させる事はなくなった様である。





△改良かまど略図▽



外からみた改良かまど